

勅語録

起慶應四年

第十類
冊
三十四架
三冊

国立公文書館
分類
2 A
33-5
199

親征ノ詔

ノ文字入ルヘシ

朕夙ニ天位ヲ紹キ今日天下一新ノ運ニ膺リ文武一途公議ヲ親裁ス國威之立不立蒼生ノ安不安ハ朕力天職ヲ盡不盡ニ有レハ日夜不安寢食甚心思ヲ勞ス朕不肖ト雖レ列聖之餘業先帝之遺意ヲ繼述シ内ハ列藩萬姓ヲ撫安シ外ハ國威ヲ海外ニ輝サシ事ヲ欲ス然ルニ徳川慶喜不軌ヲ謀リ天下解體遂ニ及騷擾ニ萬民塗炭ノ苦ニ陥ントス故ニ朕不得已断然親征之議ヲ決セリ且己ニ布告セシ通リ外國交際モ有之上ハ將來ノ處置尤重大ニ付

正
宣
官

天下萬姓ノ為ニ於テハ萬里ノ波濤ヲ凌キ身ヲ以テ
艱苦ニ當リ誓テ國威ヲ海外ニ振張リ

祖宗 先帝ノ神靈ニ對シテ欲ス汝列藩朕ノ不逮
ヲ佐ケ同心協力各其分ヲ盡シ奮テ國家ノ為ニ

努力セヨ

明
憲
德
四年 戊辰二月廿八日

御誓約之勅

朕幼弱ヲ以テ粹ニ大統ヲ紹キ爾來何ヲ以テ萬

國ニ對立シ 列祖ニ事ヘ奉ランヤト朝夕恐懼

ニ堪ヘサルナリ竊ニ考ルニ中葉朝政衰ヘテヨ

リ武家權ヲ專ハシ表ハ朝廷ヲ推尊シテ實ハ

敬シテ之ヲ遠サケ億兆之父母トシテ絶ヘテ赤

子之情ヲ知ル事能ハサルヤウ計リナシ遂ニ億

兆之君タルモ唯名ノミニ成リ果テ其ガ為ニ今

日朝廷之尊重ハ古ヘニ倍セシカ如クニテ朝威

ハ倍衰ヘ上下相離ル、ユト霄壤之如シカハ形

文
宣
官

勢ニテ何ヲ以テ天下ニ君臨センヤ今般朝政
一新之時ニ膺リ天下億兆一人モ其處ヲ得サル
時ハ皆朕カ罪ナレバ今日之事朕自身骨ヲ勞レ
心志ヲ苦メ艱難之先ニ立古ヘ 列祖之盡サセ給
ヒレ 蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコリ始テ天職ヲ奉
シテ億兆之君タル所ニ背カサルヘレ 往昔
列祖萬機ヲ親ラレ不臣之モノアレバ自ラ將ト
シテコレヲ征シ玉ヒ朝廷之政総テ簡易ニシテ
如此尊重ナラザルユヘ 君臣相親シミテ上下相
愛シ德澤天下ニ洽ク國威海外ニ輝キレナリ然

ルニ近來宇内大ニ開ケ各國四方ニ相雄飛スル
之時ニ當リ獨我國ノミ世界之形勢ニウトク旧
習ヲ固守シ一新之效ヲハカラス朕徒ニ九重中
ニ安居シ一日之安キヲ偷ミ百年之憂ヲ忘ルハ
時ハ遂ニ各國之凌侮ヲ受ケ上ハ 列祖ヲ辱シ
メ奉リ下ハ億兆ヲ苦シメシ事ヲ恐ル故ニ朕ユ
クニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ 列祖之御偉業
ヲ繼述シ一身之艱難辛苦ヲ問ハズ親ラ四方ヲ
經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ萬里之波濤ヲ拓
開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳之安ニ置



コトヲ欲ス汝億兆舊來之陋習ニ慣レ尊重ノミ
ヲ朝廷之事トナレ神州之危急ヲレラス朕一
タヒ足ヲ舉レハ非常ニ驚キ種々ノ疑惑ヲ生レ
萬口紛紜トレテ朕カ志ヲナサシラシムル時ハ
是朕ヲレテ君タル道ヲ失ハシムルノミナラス
從テ 列祖ノ天下ヲ失シムル也汝億兆能ク
朕ガ志ヲ體認シ相率テ私見ヲ去リ公義ヲ採リ
朕カ業ヲ助ケテ神州ヲ保全シ 列聖ノ神靈ヲ
慰シ奉ラシメハ生前ノ幸甚ナラン

年五月十四日 戊辰三月十四日

一 廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スベシ
一 上下心ヲ一ニシ盛ニ經綸ヲ行フベシ
一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲ
倦マサラシメシムルコトヲ要ス
一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ 皇基ヲ振起スベシ
我國未曾有ノ變革ヲ為シトシ 朕躬ヲ以テ衆ニ
先シテ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民
保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努
カセヨ

慶應四年戊辰三月 御諱

冊
止
冊

朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第一之大鎮四方輻湊之地宜シク親臨以テ其政ヲ視ルベシ曰テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン是朕ノ海内一家東西同視スル所以ナリ衆庶此意ヲ體セヨ

慶應四年戊辰七月十八日

六
文
宮

眞の處分記
八月廿七日

朝綱一タヒ弛ミレヨリ政權久シク武門ニ委ス
今ヤ朕 祖宗ノ威靈ニ頼リ新ニ 皇統ヲ紹キ
大政古ニ復ス是大義名分之存スル所ニレテ天
下人心ノ歸向スル所也嚮キニ徳川慶喜政權ヲ
還ス亦自然ノ勢況ヤ近時宇内形勢日ニ開ケ月
ニ盛ナリ此際ニ方テ政權一途人心一定スルニ
非ザレバ何ヲ以テ國體ヲ持シ紀綱ヲ振ハシヤ
茲ニ於テ大ニ政法ヲ一新シ公卿列藩及ヒ四方
之士ト與ニ廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スル

大

大

大

ハ素ヨリ天下之事一人之私スル所ニ非サレハ
ナリ然ルニ奥羽一隅未タ皇化ニ服セス矣リ
ニ陸梁ニ禍ヲ地方ニ延ク朕甚タコレヲ患フ夫
四海之内孰カ朕之赤子ニアラザル率土之濱亦
朕之一家ナリ朕庶民ニ於テ何リ四隅之別ヲナ
シ敢テ外視スル事アラシヤ惟朕之政體ヲ妨ケ
朕之生民ヲ害ス故ニ已ヲ得ス五畿七道ノ兵ヲ
降シ以テ其不庭ヲ正ス顧フニ奥羽一隅ノ衆豈
悉ク乖乱昏迷センヤ其間必ス大義ヲ明ニレ國
體ヲ辨スル者アラシ或ハ其力及バズ或ハ勢ヒ

支フル能ハズ或ハ情實通セズ或ハ事體齟齬シ
以テ今日ニ至ルカクノ如キモノ宜シク此機ヲ失
ハズ速ニ其方向ヲ定メ以テ其素心ヲ表セハ朕親
レツ撰ブ所アラシ縦令其黨類ト雖モ其罪ヲ悔
悟シ改心服歸セハ朕豈コレヲ隔視センヤ必ス
慶スルニ至當ノ典ヲ以テセン玉石相混シ薰蕕
共ニ同スルハ忍バサル所ナリ汝衆庶宜シク此
意ヲ體認シ一時ノ誤リニ因テ千載ノ辱ヲ遺ス
ユトナカレ

慶應四年戊辰八月七日

改元詔

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而
萬世之標準也朕雖否德幸賴祖宗之靈祇承鴻
緒躬親萬機之政乃改元欲與海內億兆更始一新
其改慶應四年為明治元年自今以後革易舊制一
世一元以為永式主者施行

明治元年九月八日



九月廿二日

戊辰九月妙感寺

權中納言藤原藤房

汝當元弘之年效力 皇室至忠惻怛千秋使入景
慕不止近江國妙感寺汝之古跡近接東巡之道追
感殊深因為慰汝之靈魂遣使石山右兵衛權佐藤
原基正賜金幣 宣

明治元年戊辰九月廿二日

東洋親政百官直諫

詔皇國一體東西同視朕今幸東京親聽內外之政
汝百官有司同心戮力以翼鴻業允事之得失可否宜
正議直諫啓沃朕心

明治元年戊辰十月十七日

加
正
官

米川神社、西園、後宮
方々ノ詔

詔崇 神祇重祭祀 皇國之大典政教基本然中
世以降政道漸衰祀典不舉遂馴致綱紀不振朕深
慨之方今更始之秋新置東京親臨視政將先興祀
典張綱紀以復祭政一致之道也乃以武藏國大宮
馭米川神社為當國鎮守親幸祭之自今以後歲遣奉
幣使以為永例

明治元年戊辰十月

大正
西
官

成化十一月泉岳寺、

大石良雄

汝良雄等固執主從之義復仇死於法百世之下使
人感奮興起朕深嘉賞焉今幸東京回遣使權辦
事藤原獻吊汝等之墓且賜金幣 宣
明治元年戊辰十一月五日

大石良雄

九
九
九
九

容保ノ意ヲ著シテ保テ
シ實出ニ志スルヲ記

賞罰ハ天下之大典朕一人之私スベキニ非ズ宜
ク天下之衆議ヲ集メ至正公平毫釐モ誤リ無キ
ニ決ス可レ今松平容保ヲ始メ伊達慶邦等ノ如
キ百官將士ヲレテ議セシムルニ各小異同アリト
雖モ中^{其非物ト違科ト}就容保之罪^{裁刑及ス}天人共ニ怒ル所死尚餘罪アリ
リト奏ス朕熟ラ之ヲ按スルニ政教世ニ洽ク名
義人心ニ明ナレハ固リ乱臣賊子無ルベシ今ヤ
朕不徳ニレテ教化ノ道未ク立ス加之七百年來
紀綱不振名義乖乱弊習之由テ來ル所久レ抑容

大
文
言

保ノ如キハ門閥ニ長シ人爵ヲ假有スル者今日逆
謀彼一人ノ為ス所ニ非ス必首謀ノ臣有リ朕曰テ
斷シテ曰其實ヲ推シテ其名ヲ恕シ其情ヲ憐シ
テ其法ヲ假シ容保ノ死一等ヲ宥メ首謀ノ者ヲ
誅シ以テ非常ノ寬典ニ處セシ朕亦將ニ自今親
勵精圖治教化ヲ國內ニ布キ徳威ヲ海外ニ輝サシ
コトヲ欲ス汝百官將士其レ之ヲ體セヨ

明治元年戊辰十二月七日

百官將士ヲ勸勵セシムル

朕惟ニルニ在昔 神皇基ヲ肇メレヨリ 列聖
相繼キ以テ朕力躬ニ逮フ朕否徳夙夜兢業
先皇之緒ヲ隊サンフヲ懼ル曩者兇賊命ニ梗シ
億兆塗炭ニ苦シム幸ニ汝百官將士之力ニ頼リ
速ニ戡定ノ功ヲ奏シ萬姓堵ヲ安スルニ至ル今茲歲
在己巳三元啓端上下又寧遠邇來賀ス朕何ノ慶
ク之ニ如シ惟フニ天道靡常一治一亂内安ケレハ
必外ノ患アリ豈戒慎セサル可シヤ朕益ス
祖業ヲ恢弘シ覃テ中外ニ被ラシメ以テ永ク

大文宮

先皇之威徳ヲ宣揚セレテヲ廢幾ス汝百官將士
勉勵不懈各其職ヲ竭シ敢テ怠憚ナク朕カ闕漏
ヲ匡救セヨ汝百官將士其勉旃

明治二年己巳正月五日

朕將ニ東臨公卿群牧ヲ會合シ博ク衆議ヲ諮詢
シ國家治安ノ大基ヲ建ントス抑制度律令ハ政
治ノ本億兆ノ賴トユロ以テ輕シク定ム可ラス
今ヤ公議所法則略既ニ定ルト奏ス宜ク速ニ開
局シ局中禮法ヲ貴ヒ協和シ旨トシ心ヲ公平ニ
存シ議ヲ精確ニ期シ專ラ 皇祖ノ遺典ニ基
キ人情時勢之宜ニ適シ先後緩急ノ分ヲ審ニシ
順次ニ細議シ以テ聞セヨ朕親シク之裁決セヨ
明治二年己巳二月廿五日

朕嚮ニ汝百官群臣ト五事ヲ掲ケ 天地神明ニ
質ニ綱紀ヲ皇張レ億兆ヲ綏安スルヲ誓フ然ル
ニ兵馬倉卒未タ其績ヲ底サス朕夙夜上ハ以テ
神明ニ畏レ下ハ以テ億兆ニ慙ツ今ヤ乃親臨汝
百官群臣ヲ朝會シ大ニ施設スルノ方ヲ諮詢ス是
神州安危ノ決今日ニ在リ誠ニ宜ク腹心ヲ披キ
肺腑ヲ表シ可否ヲ獻替スベシ朕將ニ勵精竭力
大ニ經始スル所アラントス汝百官群臣ソレ勗
哉

明治二年己巳四月二十日

朕惟ニ治亂安危之本任用其人ヲ得ト不得トニ
アリ故ニ今敬テ列祖ノ靈ニ告テ公選ノ法ヲ
設ケ更ニ輔相議定參與ヲ登庸ス神靈降鑑過
十カラシコトヲ期ス汝衆ノ斯意ヲ奉レヨ
明治二年己巳五月十三日

大文宮

朕惟復 皇道衰濟天下之溺一資汝有衆之力而
其建節巖疆宣威遠方艱苦盡瘁無所不至朕切嘉
獎之乃頒賜以酬有功顧前途甚遠矣朕克翼贊大
成益有望汝有衆汝有衆其懋哉
明治二年己巳六月二日

明治二年己巳六月四日

鍋嶋中納言

蝦夷開拓ハ皇威隆替ノ関スル所一日
モ忽ス可ラス汝直正深ク固家ノ重シ荷
ヒ身ヲ以テ之ニ任セニテ請フ其憂國濟
民ノ至情朕嘉納ニ堪ヘス獨恐ル汝高
年遽ニ殊方ニ赴クコト然レモ朕之ヲ汝
ニ委ス始テ北顧ノ憂ナカラン仍テ督務
ヲ命ス他日皇威ヲ北疆ニ宣ル汝方寸
ノ間ニアルミ汝直正懋哉

九月
正
宣

九月
正
宣

朕登祚以降海内多難億兆未夕綏寧セス加之今
歲淫雨農ヲ害シ民將ニ生ヲ遂ル所ナカラント
ス朕深ク怵惕ス依テ躬ヲ節儉スル所有テ以テ
救恤ニ充ントス主者施行セヨ
明治二年己巳八月二十五日

大
文
宮

明治二年己巳九月二日

議院

御下問

實金天下ニ蔓延ス屢勅禁ルモ未タ之
 ニ處クル方ヲ得ス官或ハ眞貨ヲ以テ引
 替ニカ是姦ヲ啓キ惡ヲ誨ルナリ或ハ
 悉ク之ヲ廢センカ其種甚多シ美惡並
 廢ス理ニ於テ行ハレシ或眞貨ヲ拆ニテ
 元估ヲ以テコレヲ買ニカ是レ稍人情ニ
 逆キモ能其方ヲ得スハ及テ怨謗ヲ

九月二日
 議院
 御下問

速カニ夫貨幣流通罔家ノ由テ寧
スル所ナリ然ニ上下困弊如此加之
互市ノ際紛紜ヲキ能ハス其皇威ヲ損
スル亦少ナカラス方今何ノ策カ克ク之
ヲ濟ヒ公私兩便ヲ得ニ宜ク商議
テ上聞セヨ

大正
九年
九月
二十
日

我大八洲ノ國體ヲ創立スル遂古ハ措テ不
論神武以降二千年寛恕ノ政以テ下ヲ
率ヒ忠孝ノ俗以テ上ヲ奉ス大寶ニ及ン
テ唐令ニ折衷スト雖モ其律ヲ施スニ至
テハ常ニ定律ヨリ寛ニス其間政ノ行隆
時ノ治亂ナキニ非ナルモ大率光被ノ德
外蕃ニ及テ保元以降軋綱紐ヲ解キ武士
權ヲ專ラニシ法律以テ政ヲ為シ刀鉅鉅以
テ下ヲ率ユ寛恕忠厚ノ風遂ニ地ヲ掃

大正
九年
九月
二十
日

ノ今ヤ大政更始宜ク古ヲ稽ヘ今ヲ明
ニレ寛恕ノ政ニ從テ忠厚ノ俗ニ復シ
萬民所ヲ得テ國威始テ振フヘシ頃
者刑部新律ヲ撰定スル時仍テ茲旨ヲ
體シ凡ハ虐故殺強盜放火等ノ外異常
法ヲ犯ニ非サルヨリハ大抵寛恕以テ添
以下ノ罰ニ處セシメントス抑刑ハ無刑ニ
歸スルニ在リ宜シク商議シテ以テ上聞ヒ
ヨ

方流氓鴟張汝有衆建節宣威艱苦盡瘁克靖北疆
朕嘉獎之廼頒賜以酬有功汝有衆懋哉

明治二年己巳九月十日

朕惟 皇道復古 朝憲維新資汝有衆之力朕切
嘉獎之廼頒賜以酬有功汝有衆勗哉
明治二年己巳九月廿六日

三條右大臣ハ

汝實美 皇道之衰運ニ際シ夙ニ恢復之業ヲ
期ス竟ニ躬天下之重ヲ係ケ出テハ則鎮將入テ
ハ則輔相能中興之業ヲ成ス洵ニ國柱石朕之肱
股切ニ歆偉勲ヲ嘉ニス乃テ賞賜シテ歆勞ニ酬
ユ吁將來輔導益望ムコトアリ汝實美其懋哉
明治二年己巳九月廿六日

蟻倉大納言ハ

汝具視 皇道之衰シ大ニ恢復之志ヲ抱ク竟ニ
太政復古之基業ヲ輔ケ躬ヲ以テ天下之重ニ任
シ夙夜勵精規畫事圖治以テ中興之業ヲ成ス洵ニ
國之柱石朕之股肱切ニ厥偉勲ヲ嘉ニス乃チ賞
賜シテ厥勞ニ酬ユ吁將來輔導益望ムコト有リ汝
具視其懋哉

明治二年己巳九月廿六日

朕聞明君徳ヲ以テ下ヲ率ヒ庸主法ヲ以テ人ヲ
待ツ顧フニ亂賊常ニ有ラス君徳奈何ニアルノ
ミ今ヤ北疆始テ平天子親定宜シク寛宥善其保以下スル所アツ
テ自新ニセシメ以テ天下ト更張セシレ

明治二年己巳九月廿八日

大
文
書

三條贈右大臣ハ

故從一位贈右大臣藤原實萬憂軋綱之不振而國
威之不宜奉事先朝竭盡忠猷慨然有匡濟之
志年子實美以底有成其謚實萬曰忠成

明治二年己巳十二月廿七日

朕恭惟 太祖創業崇敬 神明愛撫蒼生祭政一
致所由來遠矣朕以寡弱夙承 聖緒日夜悚惕
懼天職之或虧乃祗鎮祭 天神地祇 八神暨
列皇神靈于神祇官以申孝敬庶幾使億兆有所
矜式

明治三年庚午正月三日

朕恭惟 天神 天祖立極垂統 列皇相承繼之
述之祭政一致億兆同心治教明于上風俗美于下
而中世以降時有污隆道有顯晦治教之不洽也
久矣今也天運循環百度維新宜明治教以宣揚惟
神大道也曰新命宣教使以布教天下汝郡群臣衆庶其
體斯旨

明治三年庚午正月三日

朕刑部ニ勅シテ律書ヲ改撰セシム乃チ綱領六
卷ヲ奏進ス朕在廷諸臣ト議シ頒布シ允ス内外
有司其之ヲ遵守セヨ

明治三年庚午十二月廿日

故參議廣澤真臣ノ變ニ遭ヤ朕既ニ大臣ヲ保庇ス
ルコト能ハス又其賊ヲ逃逸ス抑維新ヨリ以來
大臣ノ害ニ罹ル者三人ニ及ヘリ是朕カ不逮ニ
レテ 朝憲ノ立タス綱紀ノ肅ナラザルノ所致
朕甚タ爲ヲ憾ム其天下ニ令レ嚴ニ搜索セシメ
賊ヲ必獲ニ期セヨ

明治四年辛未二月廿五日

九
正
官

朕惟フニ更始ノ時ニ際レ内以テ億兆ヲ保安シ外
以テ萬國ト對峙セシト欲セハ宜ク名實相副
ニ政令一ニ歸セシムヘシ朕曩ニ諸藩收藉奉
還之議ヲ聽納シ新ニ知藩事ヲ命シ各其職ヲ
奉セシム然ルニ數百年因襲ノ久キ或ハ其名アリテ其實舉ラサル者アリ何ヲ以テ億兆ヲ保安
シ萬國ト對峙スルヲ得ンヤ朕深ク之ヲ慨ス仍
テ今更ニ藩ヲ廢シ縣ト為ス是務テ冗ク去リ簡
ニ就キ有名無實ノ弊ヲ除キ政令多岐ノ憂無

大
文
官

ラレノイトス汝郡臣其レ朕カ意ヲ體ビヨ

明治四年辛未七月十四日

鹿兒嶋山口佐賀高知四藩知事、

汝等曩ニ大義ノ不明ヲ慨キ名分ノ不正ヲ憂ヘ
首ニ收藉奉還ノ議ヲ建ツ朕深ク之ヲ嘉ミレ新
ニ知事ノ職ヲ命シ各其事ニ従ハレム命今更治
ノ時ニ際シ益々以テ大義ヲ明ニシ名分ヲ正シ
内以テ億兆ヲ保安シ外以テ萬國ト對峙セント
ス因テ今藩ヲ廢シ縣ト為シ務テ冗ヲ去リ簡ニ
就キ有名無實ノ弊ヲ除キ更ニ綱紀ヲ張り政令
一ニ歸シ天下ヲシテ其向ヲ所ヲ知ラレム汝等其

レ能朕カ意ヲ體ニ翼賛スル所アレ

明治四年辛未七月十四日

熊本名古屋徳島鳥取知事

朕惟フニ方今内外多事ノ秋ニ際ニ断然其措置ヲ
得天下億兆ヲレテ其方向ヲ定メシムルニ非レハ
安ソ能ク宇内各國ト並立レテ以テ我國威シ皇
張セシヤ是朕カ霄旻憂慮スル所ナリ曩ニ汝
等カ建議スル所互ニ異同アリト雖モ之ヲ要ス
ルニ深シ従前ノ弊害ヲ鑑レ遠シ将来ノ猷謀
ヲ畫ス是汝等カ衷誠ノ所致朕之ヲ嘉ヒレ將
ニ施設スル所アラントス汝等更ニ能ク朕カ意

大
政
官

體レ各其所見ヲ竭セヨ

明治四年辛未七月十四日

明治四年辛未九月十四日

皇靈遷座ノ詔

朕恭ク惟ヒルニ神器ハ天祖盛靈ノ憑ル所歷
世聖皇ノ奉レテ以テ天職ヲ治メ玉フ所ノ者ナ
リ今ヤ朕不逮ヲ以テ復古ノ運ニ際レ忝ク鴻緒
ヲ承ク新ニ神殿ヲ造リ神器ト列聖皇靈ト
シコニ奉安レ仰テ以テ萬機ノ政ヲ視ントス爾群
卿百僚其レ斯旨ヲ體セヨ

九月十四日

辛未十月廿二日於小御所華族一同へ

勅諭

朕惟フニ宇内列國開化富強ノ稱アル者皆其國民
勤勉ノ南ヤルヤル南國民
ノ能ク智ヲ開キ才ヲ研キ勤勉ノカヲ致ス者ハ固
リ其國民タルノ本分ヲ盡ス者ナリ今我國舊制
ヲ更革シテ列國ト并馳セント欲ス國民一致勤
勉ノカヲ盡スニ非レハ何ヲ以テ之ヲ致ス_ト得
ンヤ時ニ華族ハ國民中貴重ノ地位ニ居リ衆庶
ノ屬目スル所ナレハ其履行固リ標準トナリ一層
勤勉ノカヲ致シ率先シテ之ヲ鼓舞セサルヘケ

大文宮

冊
正
備

シヤ其責タルヤ亦重シ是今日朕カ汝等ヨ召
シ親シク朕カ期望スル所ノ意ヲ告グル所以ナ
リ夫レ勤勉ノカヲ致スハ智ヲ開キ才ヲ研ヨリ
外ナルハナレ智ヲ開キ才ヲ研ハ眼ヲ守内開
化ノ形勢ニ着ケ有用ノ業ヲ修メ或ハ外國へ
留學シ實地ノ學ヲ講スルヨリ要ナルハナレ
而年壯ヲ過キ留學ヲ為シ難ト者ヒ一タレ海
外ニ周遊シ聞見ヲ廣マル亦以テ智識ヲ増益マ
ルニ過ラン且我邦女學ノ制ホタ立タカルヲ以
テ婦女多クハ事理ヲ解セズ殊ニ幼童ノ成立

ハ母氏ノ教導ニ関シ實ニ切緊ノ事ナレハ今
海外ニ赴ク者妻女或ハ姉妹ヲ挈テ同行スル固
ヨリ可ナルヲニテ外國所在女教ノ素アルヲ曉リ
育兒ノ法ヲモ知ルニ足ルベシ誠ニ能ク人々此ニ注意
シ勤勉ノカヲ致サハ開化ノ域ニ進ミ富強ノ基隨
テ立列國ニ并馳スルモ難カラサルヘシ汝等能ク
斯意ヲ體シ各其本分ヲ盡シ以テ朕カ期望スル
所ヲ副ヘヨ

明治四年辛未十月廿二日

明治四年辛未九月三日於延遠館兵部大輔少
輔御親兵少佐以上、

勅語

汝等積年苦勞レ以テ今日ニ到ル所謂實力ナル者
全ク汝等朕役スルニ在リ朕太ク之ヲ嘉トス殊ニ方
方今交内務務日新ノ時ニ當リ邦家之盛衰ハ
實ニ兵之強弱ニ存ス汝ラ深ク朕カ意ヲ躰レ彌以
紀律嚴明衆心一致レ勸精盡カレヨ

大
文
官

大
正
官

明治四年辛未九月四日

侍従一同へ

詔書

朕惟^フニ風俗ナル者移換以テ時ノ宜^ニキ隨^ヒ國
體ナル者不拔以テ其勢ヲ制ス今衣冠ノ制中古唐
制ニ摸倣セシヨリ流^テ軟弱ノ風ヲナス朕太^ク慨
之夫天子親^ラ之カ元帥ト為^リ衆庶以テ其風ヲ
仰^ク

神武創業 神功征韓ノ如キ決^テ今日ノ風俗ニ
ラス豈一日モ軟弱以テ天下ニ示^ス可^クシヤ朕今斷

大
文
宮

然其服制ノ更ノ其風俗ヲ一新シ
祖宗以來尚武ノ國體ヲ立ント欲人汝近臣其
朕カ意ヲ體セヨ

明治四年辛未十一月四日

特命全權大使副使ハ

勅語

今般汝等ヲ使トシテ海外各國ニ赴カシム
朕素ヨリ汝等ノ能ク其職ヲ盡シ使命ニ堪
ユヘキヲ知ル依テ今國書ヲ付ス其能ク朕カ
意ヲ體シテ努カセヨ朕今ヨリシテ汝等ノ無
恙歸期ノ日ヲ祝センコトヲ俟ツ遠洋千万
自重セヨ

理事官ハ

勅語

今般汝等ヲ海外各國ニ赴カシム朕汝等カ能ク其職ヲ奉シ其任ニ堪ユヘキヲ知ル黽勉事ニ從フヲ望ム遠洋渡航千萬自重セヨ

明治四年辛未十一月四日

理事官司法大輔

佐々木高行ハ

勅旨

一 各國ノ内文明最盛ナル國ニ於テ本省緊要ノ事務目今實地ニ行ル景況ヲ親察シ其方法ヲ研究講習シ内地ニ施行スヘキ目的ヲ立ツヘシ
一 研究講習スル事務ノ科目ヲ分テ及其國ヲ定メ便宜行事ノ循序期限

大文官

等ハ特命^全權大使ノ指揮ニ從フヘシ
 一 隨行ノ官員ニ事務ノ科目ヲ分ツ
 ハ特命全權大使ノ指揮ニ由ルト雖
 其事務ヲ督シ之ヲ整理スルノ責
 ニ任スヘシ
 一 本省要用ノ為メ外國人ヲ雇ヒ書籍
 器具等ヲ購スル事アラハ特命全權大
 使ノ決判ニ從フヘシ
 一 臨機ノ事ハ凡テ特命全權大使ノ指
 揮ヲ受處置スヘシ

一 當務ノ顛末研究習學ノ功程等時
 々書録シテ報告スヘシ
 右勅旨件々宜ク遵奉シテ愆ルヲ勿ル
 ヘシ

奉勅 太政大臣三條實美書判

明治四年辛未十一月廿二日

横須賀造船所御雇佛人

勅語

造船ノ諸場能ク整備爰ニ其基業ヲ創立ス朕今
巡覽不堪悦喜是偏ニ汝始ノ勉力ニ依ル朕深ク之
ヲ嘉賞ス

大
政
官

大
政
官

明治五年壬申五月廿二日

太政大臣三條實美ハ

詔書

朕西巡ノ間親ク政ヲ視ル事ヲ得ス凡ソ百
ノ事爾實美ニ委任ス爾實美其レ朕
カ意ヲ體シテ之ヲ處分セヨ若シ夫重
大ノ件ニ至テハ一々之ヲ以聞シテ裁シ請
ハ而シテ事ノ緊急ニシテ替緩スベカラザル
モハ便宜處決シテ後其事由ヲ以聞ス
ベシ

巡幸之節京都府華族へ

詔諭

方今宇内列國開化ノ時ニ際シ我國ノ舊
制ヲ更革シテ列國ト并馳セント欲スル
固ヨリ國民一致勤勉ノカヲ盡スニ非レハ
何ヲ以テ之ヲ致スヲ得ニヤ特ニ華族ハ
國民中貴重ノ地位ニ立テ衆庶ノ屬目ス
ル所ナレハ一層勤勉ノカヲ致シ率先之ヲ
鼓舞セラル可ラス其責タルヤ亦重シ是朕
カ汝等ニ期望スル所ナリ夫勤勉ノカヲ致

大正
九年
五月
二十
日

スハ知ヲ開キオヲ研ヨリ外ナルハナシ智ヲ
開キオヲ研ハ宇内開化ノ形勢ニ着眼シ
旧来ノ陋習ヲ去リ實地ノ學ヲ講シ有用
ノ業ヲ脩ムルヨリ要ムルハナシ人々此ニ注
意シ誠ニ能勤勉ノカヲ致サハ開化ノ域ニ
進ミ富強ノ基隨テ立列國ト分馳スル亦
難カラサルヘシ汝等能ク斯意ヲ體シ勤勉
シテ朕カ期望スル所ニ副ヘヨ

京都市下學校御雇

外國教師

勅語

生徒教育盡カノ段朕甚ク之ヲ嘉ム朕更ニ
汝等ノ勤勉シ生徒ヲシテ益研學懈ラサウ
レソシテ望ム

大政官

大阪造幣寮雇

英人キンドルハ

造幣ノ諸場爰ニ其基業ヲ創立シ其規模
ヲ整正ス此レ偏ニ汝等ノ勉力ニ依ル朕深
ク之ヲ嘉賞ス

明治五年壬申九月十二日

鐵道開業ニ付新橋横濱兩所鐵道館へ
臨幸中外衆庶へ

勅語

今般我鐵道之首線工竣ルヲ告ク朕親ラ開行シ其
便利ヲ欣フ嗚呼汝百官此盛業ヲ百事維新ノ初ニ
起シ此鴻利ヲ萬民永亨之後ニ惠ントス其勦精
勉力實ニ嘉尚スヘシ朕我國ノ富盛ヲ期シ百官
萬民之為メニ之ヲ祝ス朕更ニ此業ヲ擴張シ此
線ヲシテ全國ニ蔓布セシメンコトヲ庶幾ス

右百官、

東京横濱間之鐵道朕親ク開行ス自今此便利ニ
ヨリ貿易愈繁昌庶民益富盛ニ至ランコトヲ望ム

右人民、

明治廿年壬申十一月九日

改曆ノ節

詔

朕惟フニ我邦通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以
テ月ヲ立テ太陽ノ躔度ニ合ス故ニ二三年間必
閏月ヲ置カザルヲ得ズ置閏ノ前後時ニ季候
ノ早晚アリ終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル殊ニ
中下段ニ掲ル所ノ如キハ率子妄誕無稽ニ
屬シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトモス蓋シ
太陽曆ハ太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ立ツ日子多

大改曆

少異アリト雖ル季候早晚ノ變ナク四歳
毎ニ一日ノ閏ヲ置キ七千年ノ後僅ニ一日ノ
差ヲ生スルニ過ズ之ヲ太陰曆ニ比スレバ取
テ精察ニシテ其便不便モ固リ論ヲ俟タ
ザルニ依テ自今舊曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用
ヒ天下永世之ヲ遵行セシメシ百官有司
其レ斯旨ヲ體セヨ

明治五年壬申十一月廿八日

徵兵詔

朕惟ルニ古昔郡縣ノ制全國ノ丁壯ヲ募リ
軍團ヲ設ケ以テ國家ヲ保護ス固ヨリ兵
農ノ分ナシ中世以降兵權武門ニ歸シ兵
農始テ分レ遂ニ封建ノ治ヲ成ス成康ノ
一新ハ實ニ千有餘年来ノ一大變革ナリ此
際ニ當リ海陸兵制モ亦時ニ後ヒ宜シク制セサルベカラズ
今本邦古昔ノ制ニ基キ海外各國ノ式ヲ勘
酌シ全國募兵ノ法ヲ設ケ國家保護ノ基

ヲ立ント欲ム汝百官有司辱ク朕カ意ヲ
體シ普ク之ヲ全圖ニ告諭セヨ

明治六年一月五日新年宴會

勅語

朕茲ニ新年ヲ賀シ併テ改曆ヲ祝シ羣臣ヲ會同シ
宴ヲ張リ舞樂ヲ奏セシム汝群臣朕カ俱ニ慶スルノ意ヲ
體シ其レ能ク歡ヲ盡セヨ

大臣奉答

天皇陛下茲ニ新年ヲ賀シ併テ改曆ヲ祝シ玉ヒ
群臣ヲ會同シ酺宴ヲ賜ヒ舞樂ヲ奏セシメ特
ニ寵命ノ辱ヲ拜ス群臣感喜ノ至ニ勝ヘサルナリ
豈歡ヲ盡シ樂ヲ極メサラシヤ乃チ恭ク祝賀シ且

陛下ノ萬福ヲ祈リ奉ル

明治六年一月廿九日紀元日賜宴

勅語

朕茲ニ紀元ノ吉日ヲ祝シ群臣ヲ會同シ酺宴ヲ張リ
舞ヲ奏ヒシム汝群臣朕カ偕ニ祝スルノ意ヲ躰シ其
レ能ク歡ヲ盡セヨ

大臣奉答

天皇陛下茲ニ紀元ノ吉日ヲ祝シ賜ヒ群臣ヲ會
同シ酺宴ヲ賜ヒ舞樂ヲ奏ヒシメ殊ニ
寵命ノ辱ヲ拜ス羣臣感喜ノ至リニ勝ヘサル
カリ豈歡ヲ盡サ、ラニヤ乃恭ク祝賀シ且

大臣奉答

陛下ノ萬福ヲ祈奉ル

明治六年五月二日

職制章程改正之詔

明治四年辛未七月制定スル所官省ノ位置職責ノ權限各序ヲ得ルト雖モ當今ノ時勢現務上ニ於テ或ハ其弊ヲキ能ハス故ニ太政官ノ職制章程ヲ潤飾ス百官其レ之ヲ奉承セヨ

明治六年五月八日

近衛各大隊

勅語

今般炎上之際當直兵ハ勿論各大隊神速出張時機ヲ失ハス各職務ヲ盡ス将来猶又勉勵

ビヨ

大正
政
官

大正
政
官

明治六年五月十七日

改定律例ニ冠スル上諭

朕曩ニ司法ニ勅シ國家ノ成憲ニ原キ各國ノ定律ヲ酌
ニ改定律例ヲ修撰セシム今ヤ編纂成ヲ告ク朕乃チ内
閣諸臣ト辨論裁定シ之ヲ頒行セシム爾臣僚其レ之ヲ遵
守セヨ

九月
政
事

改
律

明治六年五月十八日

三條太政大臣、

勅諭

朕前日回祿ノ災ニ遭ヒ宮殿之カ為ニ蕩盡スト雖ニ
今ヤ國用夥多之時ニ際シ造築之事固リ之ヲ
亟ニスルヲ希ハス朕カ居室ノ為ニ民產ヲ損シ黎庶
ヲ苦マシムルコト勿ルベシ汝實美其レ斯意ヲ體シヨ

大
政
官

大
政
官

明治六年五月二十日於假皇居各地方勅奏官、

勅諭

朕惟フニ方今國ノ未タ開^{明治六年五月二十日}汝等地方之官ニ
任レ人民ヲシテ朕カ意ノ在ル所ヲ信奉セシムルハ其
勞劬想フ可シ夫善ク斯民ヲ誘導シ各ヲシテ其
所ニ安シセシムル固ヨリ是牧民タル者ノ職ニシテ其
任甚重シト云ヘシ汝等其能斯旨ヲ體シ努力セヨ

大
政
官

大
政
官

明治六年七月廿八日

地租改正ノ詔

朕惟ニ租税ハ國ノ大事人民休戚ノ係ル所ナリ従前其
法一ナラス寛苛輕重率ニ其平ヲ得ス仍テ之ヲ改正セ
ント欲ミ乃チ所司ノ群議ヲ採リ地方官ノ衆論ヲ盡シ
更ニ内閣諸臣ト辯論裁定シ之ヲ公平畫一ニ歸セシム
地租改正法ヲ頒布ス庶幾クハ賦ニ厚薄ノ弊ノク民ニ
勞逸ノ偏ナカラシメン主者奉行ヒヨ

明治六年十月廿四日

右大臣 巖倉具視へ

勅書

朕継統ノ始ヨリ先帝ノ遺旨ヲ體シ誓テ保國安民ノ
責ヲ盡サントス頼ニ衆庶同心協力漸ク全國一致ノ治
體ニ至ル於是國政ヲ整ヘ民力ヲ養ヒ勉テ成功ヲ永遠
ニ期スヘシ今汝具視カ奏狀之ヲ嘉納ス汝宜ク朕ノ意ヲ
奉承セヨ

明治六年十二月十七日

横須賀造船所御雇ウエルニ

勅語

造船ノ諸場年ヲ追テ益整備ス之レ偏ニ汝等ノ盡
力ニ依ル朕深ク之ヲ嘉賞ス

大
政
官

大
政
官

明治六年十二月廿七日

長谷部開拓中判官

勅諭

柯太之儀、絶彊洎寒之地殊、魯人雜居事務、
繁冗之憂奉命以來永、堅忍在勅之故神妙、
候尚此上勸精盡力可致事

本
文
書

明治七年一月五日新年宴會

勅語

朕茲ニ新年ヲ賀シ、舖宴ヲ張リ、羣臣ヲ會同
ス。汝群臣朕カ俱ニ慶スルル意ヲ體シ、其レ缺
歎ヲ盡セヨ

大
政
部

大
政
部

明治七年一月廿日

詔書

今般陸海軍費之為_レ新_ニ祿稅ヲ設_クルハ要_スルニ國力ヲ強_クシ人民ヲ保護_スルニアリ朕モ亦
マ_カニ自_ラ簡約_ニ從_ヒ以_テ其費_ニ充_ツハレ汝等
司_等斯_旨ヲ體_レ凡_ソ宮中ノ用度_ニ於_テ務_テ
減省_{スル}所_{アリ}

別紙詔書寫之通被 仰出候付テハ宮中御
用途之内三萬六千圓年々兵備ニ被_ル為

大
改
寫

充候此旨申進候也

月日

宮内卿徳大寺實則

太政大臣三條實美殿

明治七年一月二十三日陸軍軍旗御授與式被
為行候節

勅語

近衛歩兵第一聯隊編制或ルヲ告ノ仍テ今軍
軍族一統ヲ授ク汝軍人等協力同心レテ益威威
ヲ宣揚シ以テ國家ヲ保護セヨ

近衛歩兵第二聯隊以下

明治七年二月十一日紀元節

勅語

朕茲ニ紀元ノ吉日ヲ祝ヒ
鋪宴ヲ張リ羣臣ヲ會
同ス汝羣臣朕力俱ニ慶ス
ル意ヲ體ヒ其ト能ク
歡ヲ盡セヨ

明治七年二月十三日

從二位鳥津久光、

勅語

汝久光近且鎮西之形勢ヲ憂ヒ自ラ鹿兒嶋縣
ニ赴カント縷々上陳ス朕甚其至誠之哀情
ヲ感ス今ヤ國家多事之際朕カ左右ヲ離ル
可ト雖事情亦止テ得サルニ出ツ宜ク急ニ本
縣ニ空リ夫能クカヲ竭スヘシ尚速ニ歸京有
ルヲ俟ツ

明治七年二月廿八日佐賀縣下暴動ニ付
張之聯隊長大隊長、

勅語

佐賀縣賊徒征討ニ付特ニ總督ニ假スニ朕カ親
軍兵衛第二聯隊ヲ以テシ朕カ黎元ヲ保護
スルノ意極テ切ナルヲ明ニス汝等能ク斯旨シ
體ニ奮發後事速ニ平定ノ功ヲ奏ロコ

居守聯隊長大隊長ハ

勅語

佐賀縣賊徒征討トシテ特ニ總督ニ假人ニ援カ
親軍近衛第二聯隊ヲ以テ之ニ赴カシム仍テハ
輦轍ノ下守衛一層能ク心ヲ用ヒ勉勵從事スルハ
レ

明治七年五月三十一日

陸軍少將野津鎮雄ハ

勅語

曩ニ佐賀縣ノ役屢ニ賊銳ヲ挫キ速ニ平
定シテ奏スルニ汝ハ方畧宜シキヲ得兵卒ヲ
率非勵マシ勇進奮戰ノ致人ノ所賞ニ其職
ヲ辱シノスト謂フヘシ朕深ク之ヲ嘉賞ス

明治七年十一月十二日

台灣蕃地事務都督西鄉從道

勅語

朕向々ニ汝從道ニ命シ都督トシテ兵ヲ率ヒテ
罪ノ蕃地ニ向ハシメ三條ヲ勅シ十款ヲ諭ス汝
遵奉懈ラス克ク其功ヲ奏ス然ルニ清國異議
ヲ其間ニ生シ事數月ニ彌ル今ト全權辦理大臣
大ニ你利通等同國政府ト互ニ條款ヲ換ヘ彼
已ニ我義舉ヲ認メ以テ我兵ヲ撤シ火ニ和好シ
全クスルニ至ル乃チ汝ヲシテ全軍ヲ將テ凱旋セ

大
文

シハ其ノ斯百ヲ奉ヒヨ

明治七年十一月廿七日

參議兼內務卿大久保利通

汝利通臺灣蕃地之舉アルハ清國ハ大ニ其事ヲ理セシム
タルニガリ辦理大臣ノ重任ヲ奉ミ往テ其事ヲ理セシム
汝克ク朕ノ旨ヲ體シ及覆辨論遂ニ能ク國權ヲ全ク
シ又誠ヲ保存セシム是レ汝ノ誠心ヲ竭ク義ヲ執テ
愧イタルノ致ス所ナリ帝ニ朕カ心ヲ安スルノミナラズ實ニ北
庭ノ慶福ク其功大ナリト謂フ可シ朕深ク之ヲ嘉尚
ス

大
教
書

明治七年十二月廿七日

臺灣蕃地事務都督西鄉從道

以後通嚮并二都督ノ命ヲ奉ルルヲ蕃地ニ入ル

不田ニシテ荒魁ヲ謀ニ謀ニ諸蕃相踵テ降附

也止山邊一ニ汝ノ艱險ヲ冒シ身カシ竭クニ由ル

朕深ク之ヲ嘉尚ス

本
政
官

明治八年二月十二日

皇國造幣寮前長

英く
其
功
績
を
記
す

勅語

我那邊幣寮ヲ創建セシムル以來汝首ニシテ其
職ヲ奉ヒ能ク其力ヲ効シ凡ソ其幣鑄造ノ
事ヨリ緊中諸局ノ建築其他ノ製造事
業ニ至ル迄一ニ之ヲ擔當シ遂ニ今日ノ成績
ヲ見ル是ハ實ニ汝ノ功勞朕深ク之ヲ嘉賞
ス今汝國ニ歸ルヲ告ク仍チ汝ノ航路恙ナ

大
教
官

ク併ニ将来ノ幸福ヲ望ム

朕茲ニ紀元ノ吉日ヲ祝ヒ
鋪宴ヲ張リ君羊臣
ヲ會同ス汝群臣朕カ俱ニ
慶レルル意ヲ體
シ其能ク少歆ク盡セヨ

大政官

明治八年三月五日

横須賀 行幸之節

首長ウユルニ等ハ

勅語

新製ノ清輝艦水卸ノ式ヲ執行ス是全ク汝
等ノ盡カニ依ル朕喜悅ニ堪ヘク尚一層速ニ
落成ヒレテヲ希望ス

水
成
宮

朕即位ノ初首トシテ羣臣ヲ會ニ立事ヲ以テ
神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム
華ニ祖宗ノ靈ト群臣ノカトニ頼リ以テ今日ノ
小康ヲ得タリ願ニ中興ノ日淺ク内治ノ事當ニ
振作更張スル者少シトセ朕今誓文ノ意ヲ
擴充シ茲ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ源ヲ廣
メ大審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ鞏クシ又地
方官ヲ召集シ以テ民情ヲ通シ公益ヲ圖リ漸
次ニ國家立憲ノ政體ヲ立テ汝衆庶ト俱ニ

七月廿一日

其慶ニ賴ラント欲ス汝衆庶或ハ舊ニ泥ル故
ニ慣ルヲ莫ク又或ハ進ムニ輕ク為スニ急ナリ
一莫ク其レ能ク朕カ旨ヲ體シテ翼賛ムル
所ナレ

明治八年七月

奉天朕爰ニ親臨シテ始テ本院ヲ開キ爾衆議
官等ニ詔ク朕前日衆庶ニ告グルニ元老院ヲ
設テ立法ノ源ヲ廣ムルノ旨ヲ以テ乃チ爾衆
議官ヲ以テ立法ノ官カラシム尚クハ爾等各
己乃チ心カシ一ニレ乃チノ職任ヲ盡シ允ニ
上下ノ康福ヲ圖ラハ實ニ國家無疆ノ休
ヲ欽テ斯意ヲ體シテ其レ能ク贊襄トシ
明治八年七月五日

大文宮

明治八年六月廿日分

地方官會議開院詔

茲ニ地方官會議ノ始朕親テ臨テ汝各官
等ニ詔ク徑國地民ノ易クテナルヲ思ヒ深
ク公論衆議ニ望ムトアリ今汝各地方ノ重
任ニ居リ親シク民情ヲ知ル誠ニ能ク同心
協力ニ事多端ナルモ務テ其急ヲ先ニシ
議論異同アルモ要スルニ其歸ヲ一ニシ專ラ
衆庶ノ為ニ公益ヲ圖ラハ則チ斯會ヤ國家
無彊ノ幸福ヲ開クノ始タラシ汝各官具レ斯

大
文
一
百

皇日シ體セヲ 鳥ノ子野組

明治八年七月十七日

地方官會議閉院詔

會議終ルヲ告ク朕深ク汝各官ノ能ク誠
ヲ致シ言ヲ竭スヲ嘉ニス奏スル所ノ答議
ハ更ニ元老院ノ議ヲ徵シ朕親ラ之ヲ裁
スヘシ汝各官自今往テ常職ニ就テ益
ニ庸ノカヲ盡シ以テ我カ治ヲ賛ケテ

大文

明治八年十一月八日

露西亞國水師提督

并士官公使等

勅語

今度卿が指揮せる軍艦東洋在勤ヲ命
せられ初る我國ニ航海せられ幸ニ相見
悦ぶ我國滞在申快樂ナラシメ望ム

明治八年十二月三日

獨逸國前臨時代理公使

勅語

卿今我國在留ノ任ヲ解キ辨脛公使トシテ南亞
米利加國ニ赴任スルノ旨ヲ告テ朕卿ノ奔任力
ヲ賀公是迄懇親トシテ以テ殊ニ別カ惜公且
凌寒ノ候航海恙ナカラントテ祈

大政官

同國艦長兼辨艦長

勅語

今度御我國ニ航海ニ幸ヒ相見ヲ悦、
滯留中殊ニ快樂ナランコト望ム

明治八年十一月三日

獨逸國辨艦公使同艦時
代艦公等同國軍艦長

勅語

貴國皇帝陛下敕國ハ親睦ヲ保稱ニ由深厚
サカシマンカ敬セラレ前公使轉任ノ後ニ繼リ
ヲ我國在留辨艦公使ニ命セラレ、ク貴國親善
ノ方報セラレ朕之ヲ嘉納ス、卿ハ陳セラレ、
如ク朕ノ天際益親昵ナリ加ニ貴國在留北白川
艦長モ皇帝陛下ヨリ常ニ懇待ヲ蒙ルヨリ朕

大政官

ノ深ク感喜スル所ナリ又御我國在箇中勉
勵能ク其職ヲ盡シ兩國ノ文誼益親密
ニ至シテ信ス

明治八年十二月廿八日

一品親王有栖川熾仁

二品親王山階 晃

同 有栖川熾仁

同 伏見貞愛

同 東伏見嘉彰

三品親王梨本守修

同 華頂博経

同 北白川能久

同 久邇朝彦

大坂宮

勅語

朕曩ニ賞牌ノ制ヲ定メ式ニ依テ鑄造セ
レノヲ成ル今ヤ朕首トメ之ヲ佩ク且ツ
卿等ニ賜與ス卿等ソレ斯寵榮ヲ同
セヨ

明治八年十二月三十日

海軍省備教師

佛人造船所首長

行エルニ

勅語

我邦造船所ノ副設セシ以來十一年ノ久キ汝
首トシテ其職ヲ奉シ其力ヲ効シ凡ソ諸場ノ
建築又ハ我新造艦船ヲリ内非修理ノ艦船
其他ノ製造事業ニ至リ迄一ト之ヲ擔當シ遂
ニ今日ノ成績ヲ見ル是レ實ニ汝ノ功勞朕深

大
宮

ノ之ヲ嘉賞ス且汝ノ歸路急無キト將來
ノ幸福トシ望ム

明治九年二月十四日

英國人

ホリス

勅語

我朝明治四年海軍教師ニ依頼セシ以來
軍艦龍驤号ノ教授海兵隊ノ練法等汝
能ク進勉盡力ニ終ニ今日ノ成績ヲ見ル
朕深ク其功勞ヲ嘉賞ス

大
紋
書

明治九年二月廿二日

陸軍中將後西郷從道

勅語

汝曩ニ臺灣蕃地事務都督トシテ彼地ニ
出張翰躬盡力兼其軍ヲ得速ニ成功ヲ
奏メ朕深ク之ヲ嘉ニス依テ勲一等は叙シ
賞彈ヲ賜與ス

大
政
官

明治九年三月五日

特命全權辦理大臣黑田清隆
特命全權辦理大臣井上馨

勅語

朕汝清隆馨等ヲ朝鮮國ニ派遣スルヲ負
シムルニ重任シ以テス汝等黽勉克ク其使命
ヲ全テ新ニ條約ヲ互換シ以テ兩國ノ好
シシ
為ヒリ朕甚ク之ヲ嘉ニス

明治九年四月五日

議官公位柳原前光

勅諭

汝曩ニ台湾蕃地ノ舉ヨリ清國ト大ニ
葛藤シ生シ全權辦理大臣大久保利通
未タ派出セサルノ際彼國政府ト反覆辯
論遂ニ成功ニ至ル朕甚ク之ヲ喜ビテ
其賞トシテ金千圓ヲ賜與ス

大
久
保
利
通

明治九年九月六日

議長三浦親勲等有栖川熾仁

勅語

朕爰ニ我建國ノ體ニ基キ廣ク海外各
國ノ成法ヲ斟酌シテ以テ國憲ヲ定メント
ス汝等之カ草按ヲ起創シ以テ聞
朕將ニ之ヲ撰ハントス

大
政
三

明治九年九月廿二日

特命全權辦理大臣黒田清隆

朕曩：汝清隆ヲ朝鮮國ニ派遣シ負ハレム
ルニ重任ヲ以テス汝克ク黽勉シテ終ニ其使
命ヲ全フレ新條約ヲ互換シ以テ兩國ノ好
シヲ為セリ朕甚ク之ヲ嘉ニス仍テ其賞ト
シテ金幣ヲ賜與ス

目錄金

同年同月日

特命副權辦理臣井上馨

朕曩ニ黒田清隆ヲ朝鮮國ニ派遣スルヤ汝馨
ヲ副タラシム遂ニ克ク其使命ヲ全フレ新ニ條約ヲ
互換レ以テ兩國ノ好ミヲ為セリ朕甚ク之ヲ嘉ミ
ス仍テ其賞トシテ金幣ヲ賜與ス

目錄金

大
文
三

明治十年一月四日

詔書

朕惟フニ維新日淺ク中外多事國用資ニ費ラレス
而シテ兆民猶ホ疾苦ノ中ニ在リテ未ク富庶ノ澤ヲ
被ラサルヲ愍ミ曩ニ舊税法ヲ改正シテ地價百分ノ三
トナシ偏重無カラシメントス今又稼穡ノ艱難ヲ察シ
深ク休養ノ道ヲ念フ更ニ稅額ヲ減シテ地價百分ノ
二分五厘ト為サン有司宜ク痛ク歳出費用ヲ節減シ
テ以テ朕カ意思ヲ替員クヘシ

明治十年一月十五日 奉書四

元老院開院式

勅語

朕爰ニ親臨シテ開院ノ典ヲ行フ爾衆議官等能
朕ノ旨ヲ體シ尚益々勉勵アラントウ望ム